

追悼

故 山近 道宣 会員 (16期)
2019年 3月 5日 逝去・82歳
1986年度東京弁護士会副会長



山近道宣弁護士を偲んで

会員 和田 一雄 (44期)

当事務所の先々代表であった山近道宣弁護士が、2019年3月5日に逝去された。

山近弁護士の印象を一言でいえば、「剣客商売」(池波正太郎著)の主人公の一人、秋山小兵衛である。山近弁護士も、小柄であり、タバコ好き、総銀髪、吸い込まれそうな大きな黒目、にこやかな顔、大きな声、耳が痛いことも話すが含まるところは何もない、時には子供っぽい面も見せる、見た目以上の大きな印象を与える人物であった。

山近弁護士は、根っからの仕事人であった。仕事中は無駄話をせずに集中。昼食も15分程度。裁判後はすぐに事務所に帰る。当然、期日報告もすぐに行なうし、次回期日提出予定の準備書面も速やかに着手する。勉強家でもあった。事務所内回覧の法律雑誌・書籍類のいたるところにラインマーカーが引かれていた。

さりとして、単に法律研究のみに執着するのではなく、常に「一般常識」を意識されていた。しかも、自分の考える一般常識が正しいかどうか意識的に検証されていた。私には「理論的に無理だな」と感じる主張であっても、一般常識に反しなければ「法解釈がおかしい」として、依頼者のために戦ったこともあった。このような姿勢から、依頼者の信頼は厚く、少々耳が痛い助言でも、依頼者は受け入れた。一緒に相談を受けていた際、私の説明に対して余り納得しなかった依頼者が、山近弁護士の一言で、安心した顔になったことがあった。私が落胆していると、「君が詳細に説明してくれたからだよ」と言いつつ、「このおかげだよ」と冗談めかして自身の銀髪を指さすこともあった。

山近弁護士は、さりげない気遣いのできる優しい人でもあった。忙しい時間の合間を縫って、よく

お酒に誘ってくださった。シーバスリーガルのダブルの水割りがお気に入り。タバコを煙らせながら、仕事中にはしない裏話やとりとめのない話をした。また、他の事務所の先輩弁護士や依頼者と一緒に飲む機会を作ってください、人とのつきあい方を身体で覚えさせてくれた。おかげで、引き継いだ依頼者との関係も良好に保つことができています。

山近弁護士の気遣いは、内輪に対してだけではない。顧問会社が集団訴訟を起こされたときのことであった。原告代理人が、尋問の途中で気分が悪くなり倒れた。相原告代理人は呆然として動くことができなかったが、被告代理人である山近弁護士がすぐに動いて介抱していた。「人として当然のこと」と言われていたが、あれほど素早く動けたのは、「気遣いの人」だからであろう。

ご逝去の連絡も山近弁護士らしいものであった。奥様からご連絡があったのは、2019年6月末。既に3か月近くも経過していた。手間をとらせるのは申し訳ないので皆には知らせないで欲しいとの山近弁護士の希望であったとのことであった。最期の連絡くらい気遣い無用なのにと考えたが、それも山近弁護士らしい。2019年3月に、山近弁護士の受勲の際に記念品としていただいた電波時計が壊れたのは、今思えば、別れの挨拶だったのかもしれない。

私も、私が入所当時の山近弁護士の年齢となり、顧問先から、山近弁護士に似てきたと言われることがある。薫陶を受けた私としては何よりの褒め言葉であり、非常にうれしい。

最後に、山近弁護士の温かいご指導に感謝をし、改めてお礼を申し上げ、心よりご冥福をお祈りする次第である。